



6月園だより

令和3年度
段原みみょう保育園

おのおの個性



先日から、4階の踊り場でイモリを飼い始めました。ある日、一歳の子どもたち数人が立ち止まり、水槽に顔を近づけ、「イ～ア～イ～…」 「ウアウアウア…」とずっと声を発し、言葉にならなくとも友だち同士で思いを言いあっているような、会話をしているかのような光景が見られました。職員が、「給食を食べる時間だからお部屋へ帰ろう。」と声をかけると、怒った表情になり、もうれつに拒否をします。すごいアピールにその職員もたじろくほどでした。結局、数分間見続けた子どもたちは、満足したのか、何事もなく、すーっとお部屋へ帰っていきました。各クラスでもザリガニや昆虫等を飼い、生き物は常に、子どもたちのアイドルです。幼児クラスに置かれた、分厚い「昆虫」や「生き物」図鑑も取り合いになるほどの人気で、みんな研究熱心です。



保育園に通ってくる140人を超える子どもたち。その一人ひとり、好きなことや物、好きな色や場所、好きな音や感触、香り…etc. みんな異なります。とかく日本人は、集団行動を好むとか、自分を表現するのが苦手だ、目立たないようにし、周囲に合わせる人が多いなどと言われますが、保育園の子どもたちは、そんなことはなく、個性いっぱい輝いています。

立命館アジア太平洋大学学長 出口 治明 氏は、メディアや数ある手記の中で、国際競争力が低下してしまった日本において、「今後、親は子どもをどのように育てたらよいか。」という質問に対し、「一つ目は、それぞれ顔が異なるように人の個性も能力もみんな違うのだから、『比べる』ことをやめること。二つ目はどんなことでもいいので、その子が好きなことを最後までさせること。三つ目は、子どもが考え、一生懸命に行動した時は、結果は度外視し、ひたすら褒めてあげること。」この三つが大切とおっしゃっています。

大人から見て「いい子」ってどんな子でしょう。しつけがきちんとされた子？大人の思う通りに動く子？決められたことをきちんとする子？…大人は、理想とする「いい子の姿」をそんな風に思っているのではないのでしょうか。その子の個性はどうなるのでしょうか。いわゆる「いい子」とされる子が、将来豊かな生き方をしているかという、決してそうとは言い切れません。ますますアイデア勝負となる未来に向けて、全世界の教育界が、個性を大事にし、非認知能力を育てることに力を注いでいます。子どもの主体性を育むことが一層重視され、何を知っているか、何ができるかではなく、自分が向き合っている問題を解決する…そんな資質や能力が求められています。

保育園の子どもたちの好奇心は多岐に渡ります。保育者は、その一人ひとりの思いに寄り添い、夢中、没頭している時は、見守り、その子が納得いくまで取り組めるようにしてあげたいと思っています。それは、数分で終わることもあれば、幼児クラスともなれば、友だちと共に取り組み、何日も続くことがあるかもしれません。そんな経験があればあるほど、その子の考える力、行動を起こす力、執着心、人と関わる力など様ざまな力が伸びていきます。それらが、非認知能力といわれる力です。

コロナ禍、そして、梅雨真っ只中ではありますが、体調面はしっかりと気をつけていながら、子どもたちの輝く個性を大切に、みんながおもいきり楽しめる保育を展開していきたいと思っています。



園長